

他人の排泄器官をじっくりと見たことなど、これまででなかった。自分のは直接見ることができないのだから、そもそも目にしたことすらない。それでも、本来ならばそこは何かを入れる場所ではないし、普段はしっかりと閉じているということも分かっている。

しかし、それが今は異物であるはずの野分の指を啜えこんでいて、またその分だけ入り口は押し拡げられていた。野分を受け入れるためだけに無防備に外気に曝されたそこは、ひどく魅惑的だった。時折収縮をしては、野分を妖しく誘っている。

そして、この美しい人の身体の中に、自身の一部である中指が入っているという事実には、野分はひどく興奮を覚えた。

どろどろとマグマが湧きあがるように、体の奥底で膨大な量の熱の塊が渦巻いている。心臓がドクリと音を立てた。

そして、もっと別のものも入れたいと、強い欲求が湧き起こる。そう、軀の中心に集まり昂ぶる熱を、

この人に突き入れたい。

——この人と、ひとつになりたい。

欲望が色鮮やかに形を為していく。

「そう……だ。指、ゆっくり搔き混ぜるように動かして……ちゃんと全部入るように柔らかくしないと……」

野分が結合部を食い入るように見つめていると、弘樹は次にするべきことを口にした。指示どおりに中で指をぐるりと回転させると、弘樹は更に鼻にかかった甘い声をあげた。

押さえ付けられた口から漏れるくぐもった声や、皺になるほど指で強く握られたシート。何もかもが、野分の理性を焼き切っていく。

堪らず、野分は二本目の指も押し込んだ。

「ま、待て……!」

弘樹の制止も聞かずに、三本目も振じ込む。まだキツかったが、ぐちゃぐちゃに搔き回した。

そして、ある一点に擦れたとき、弘樹は一際高く鳴いた。感じる場所を探り当てられて幸いと、野分